

李朝實錄

第三十三冊

鼎足山本光海君日記 第二

學習院東洋文化研究所刊

李朝實錄第三十三冊奧付

昭和三十七年十月二十五日

東京都港區芝南佐久間町一ノ五三

笠井出版印刷社印刷

東京都豊島區目白町一ノ一〇五七

學習院東洋文化研究所刊行

編纂刊行責任者 末松保和

The Ri Dynasty Annals of Korea Vol. 33
KWANGHAE-GUN ILGI (Fair copy)
II (1615~1623)

Gakushūin Institute
of
Oriental Culture

TOKYO
1962

(鼎足山本) 光海君日記解説

〔一〕 李朝の第十五代の王光海君は、諱は璵、宣祖の二男、宣祖八年（一五七五）四月に生れた。初め光海君に封ぜられ、宣祖二十五年（一五九二）四月二十九日戊午、王世子となり、宣祖四十一年（一六〇八）二月朔戊午、宣祖が薨じたので翌二日己未即位した。在位十五年（一六二三）三月十三日癸卯に廢位され、江華に放たれ、仁祖十九年（一六四一）七月朔乙亥、濟州島に薨じた、春秋六十七。母は恭嬪金氏、夫人は文化柳氏、判尹柳自新の女である。

〔二〕 この王代十五年間の日記の編修は、仁祖二年（一六二四）六月に開始され、仁祖十二年五月に終了した。編修がこのようながびいたのは、次のごとき二つの理由による。

〔三〕 理由のその一は編修資料のたびかさなる混乱・散失である。その最初は「甲子の變」すなわち仁祖二年（一六二四）二月、平安兵使兼副元帥李适の叛兵が都城を占領したときにあつた。ついで「丁卯の亂」すなわち仁祖五年（一六二七）正月、滿洲軍の侵入にあたり、官公の文書が江華島にはこばれたときにあつた。これら内外の變亂は、資料を混乱・散失せしめたのみならず、編修の工程・陳容そのものをも混乱・停滯せしめたこというまでもない。

〔四〕 理由のその二は、政局の不安定にあつた。まず資料が日々書きつがれた時（光海君の時代）と、日記編修の時（仁祖二年以後）と、政治權力をにぎるものが、黨派的に相反する立場にあつたことである。すなわち編修

廳の人々からいえば、資料（時政記など）の「執筆者は、多くはこれ兇賊の黨與、それらの手に成るものは荒疎恠戾、模様をなさず」とさえいわれたのである。政局の不安定は、編修當事の黨内にも分裂分化があつたことに認められる。仁祖八年（一六三〇）の正月には、光海君朝十五年間のうち、すでに十一年間分の編修を終えており、翌年・翌々年の間には、残りの四年間分も一通りの編修ができていたが、仁祖十一年七月十一日辛丑あらためて光海君日記の「修正」が下命された。その修正の完了したときが、とりもなおさず光海君日記の編修の終つたとき（仁祖十二年五月）であつた。換言すれば光海君日記は編修の過程において、甲派の編修と乙派の編修（修正）と二重の工程を経ていることになる。

〔五〕 編修を終つた當時の光海君日記は、正寫本（百八十六卷三十九冊）二部と、草稿本（いわゆる中草）（六十冊）一部とあわせて三部で、ひとまずそれらを江華・赤裳山・太白山の三史庫に分置しようとした。草稿本が保存されたことは、表面上は「物力を省く」ことを理由としたらしいが、實は修正以前の體様を残そうとするものではなかつたかと推察される。その後の事實をみると、草稿本は太白山史庫に納められ、正寫本は江華・赤裳山のみならず五台山史庫にも分置されている。確證はないが春秋館にも正寫本一部が置かれた可能性がある。してみれば正寫本は前後四部つくられたと思われる。

〔六〕 今日傳存する光海君日記は、正寫本の江華本（百八十七卷、四十冊）・赤裳山本（百八十七卷、三十九冊）の二部と、中草本の太白山本（百八十七卷、六十四冊）とである。正寫本の卷數が編修終了當時よりも一巻増している理由はたしかにはわからない。けれども、下文「八」條にしるす第百七十五卷のハシラおよび丁付の誤記から推せば、現在の第百七十四卷と第百七十五卷は、編修當初はあわせて一巻となつていたのではあるまい。

か。なお江華本の冊数が四十冊、すなわち一冊多くなっているのは、江華本はいくたびか破損にあつて、その都度補寫がほどこされたから、そのあいだに合卷の改廢があつたためであろう。

〔七〕正寫本は詳しくいえば一部分印刷、大部分正寫本である。すなわち卷一から卷五までは印刷。卷六は第一丁から第十四丁まで印刷、第十五丁以下は正寫。卷七は第一丁から第八丁まで印刷、第九丁以下は正寫。卷八以下はすべて正寫である。

〔八〕原本のハシラおよび丁付には、次のとき誤脱がある。

卷五十 第二十二丁 丁付を脱す。

卷百十 第十六丁 第一百十一と誤る。

卷百三十九 第二丁 第三百三十九と誤る。

卷百七十二 第九丁 第一百四十二と誤る。

卷百七十五 第一丁より第七丁まで卷次をすべて第一百七十四と誤り、丁付は一七とすべきを十一と七と誤る。

〔九〕昭和六年（一九三一）京城帝國大學は太白山本・江華本（鼎足山本）の兩本を景印した。いずれも原本を約二分一に寫眞縮刷し、製冊は、舊のままとした。

〔十〕ここに學習院東洋文化研究所が刊行する普及版李朝實錄では、先ず正寫本の一たる江華本（鼎足山本）を第三十二・三の二冊にわけて刊行し、太白山本は、全實錄の刊行を待つて最後に實施する豫定である。

昭和三十一年八月

學習院東洋文化研究所

末松

保

和

鼎足山本光海君日記(第二)目錄

乙卯七年 (一六二五)^{西曆}

正月戊申朔

一

二月戊寅朔

三

三月丁未朔

三

四月丁丑朔

九

五月丙午朔

六

六月丙子朔

三

七月丙午朔

四

八月乙亥朔

五

閏八月乙巳朔

五

九月甲戌朔

六

十月甲辰朔

七

十一月癸酉朔

八

十二月癸卯朔

九

丙辰八年 (一六一六)

正月壬申朔

十

二月壬寅朔

十一

卷百

卷九十九

卷九十八

卷九十七

卷九十六

卷九十五

卷九十四

卷九十三

卷九十二

卷九十一

卷九十

卷八十九

卷八十八

卷八十七

卷八十六

卷百一
卷百二
卷百三
卷百四
卷百五
卷百六
卷百七
卷百八
卷百九
卷百十
卷百十一
卷百十二
卷百十三
卷百十四
卷百十五
卷百十六
卷百十七

丁巳九年 (二六一七)

三月辛未朔	二七
四月庚子朔	二二
五月庚午朔	二七
六月庚子朔	三四
七月己巳朔	四二
八月己亥朔	四七
九月己巳朔	五三
十月戊戌朔	六六
十一月戊辰朔	七四
十二月丁酉朔	八五
正月丁卯朔	九八
二月丙申朔	一〇七
三月丙寅朔	一三八
四月乙未朔	一三七
五月甲子朔	一四四
六月甲午朔	一五二
七月癸亥朔	一六八

卷百十八
卷百十九
卷百二十
卷百二十一
卷百二十二
卷百二十三
卷百二十四
卷百二十五
卷百二十六
卷百二十七
卷百二十八
卷百二十九
卷百三十
卷百三十一
卷百三十二
卷百三十三
卷百三十四

戊午十年 (二六一八)

八月癸巳朔	二五
九月癸亥朔	二六
十月壬辰朔	二六
十一月壬戌朔	二六
十二月壬辰朔	二六
正月辛酉朔	二六
二月辛卯朔	二六
三月庚申朔	二六
四月庚寅朔	二六
閏四月己未朔	二六
五月戊子朔	二六
六月戊午朔	二六
七月丁亥朔	二六
八月丁巳朔	二六
九月丁巳朔	二六
十月丙辰朔	二六
十一月丙戌朔	二六

卷百三十五

十二月丙辰朔……………五〇

卷百三十六 己未十二年

(二六一九)

正月乙酉朔……………五五

卷百三十七

二月乙卯朔……………五三

卷百三十八

三月甲申朔……………五八

卷百三十九

四月甲寅朔……………五四

卷百四十

五月癸未朔……………五八

卷百四十一

六月壬子朔……………五三

卷百四十二

七月壬午朔……………五七

卷百四十三

八月辛亥朔……………五四

卷百四十四

九月庚辰朔……………五七

卷百四十五

十月庚戌朔……………五五

卷百四十六

十一月庚辰朔……………六二

卷百四十七

十二月辛亥朔……………六六

卷百四十八 庚申十二年

(二六二〇)

正月庚辰朔……………六六

卷百四十九

二月己酉朔……………六三

卷百五十

三月己卯朔……………六六

卷百五十一

四月戊申朔……………六三

卷百五十二
卷百五十三
卷百五十四
卷百五十五
卷百五十六
卷百五十七
卷百五十八
卷百五十九
卷百六十
卷百六十一
卷百六十二
卷百六十三
卷百六十四
卷百六十五
卷百六十六
卷百六十七
卷百六十八

辛酉十三年 (一六二二)

五月戊寅朔	六五九
六月丁未朔	六四八
七月丙子朔	六五五
八月丙午朔	六六二
九月乙亥朔	六六五
十月甲辰朔	六六九
十一月甲戌朔	六七七
十二月甲辰朔	六八二
正月癸酉朔	六八七
二月癸卯朔	六九〇
閏二月癸酉朔	六九二
三月癸卯朔	六九四
四月壬申朔	六九七
五月壬寅朔	七〇〇
六月辛未朔	七〇四
七月庚子朔	七〇七
八月庚午朔	七〇八

卷百六十九

九月己亥朔……………七五

卷百七十

十月戊辰朔……………七五

卷百七十一

十一月戊戌朔……………七六

卷百七十二

十二月戊辰朔……………七二

卷百七十三

正月丁酉朔……………七七

卷百七十四

二月丁卯朔……………七五

卷百七十五

三月丁酉朔……………七五

卷百七十六

四月丙寅朔……………七九

卷百七十七

五月丙申朔……………七〇

卷百七十八

六月乙丑朔……………七〇

卷百七十九

七月乙未朔……………七五

卷百八十

八月甲子朔……………七九

卷百八十一

九月甲午朔……………七九

卷百八十二

十月癸亥朔……………八〇

卷百八十三

十一月癸巳朔……………八〇

卷百八十四

十二月壬戌朔……………八二

卷百八十五

正月壬辰朔……………八五

癸亥十五年

(一六二三)

壬戌十四年

(一六二二)

卷百八十六

卷百八十七

二月辛酉朔……………八七

三月辛卯朔……………八三

光海君日記卷第八十六

七年正月朔戊申○庚戌政院啓曰自頃年以來不幸逆寇
繼起自干天誅雖以聖上仔生之德亦莫如之何目今新陽建節萬
物回生積年之獄天心必厭伏願聖上體天之令盡收忠厚方在歲
首自非逆寇則勿使究讞之物再瀾大庭之內辱六折揚之具依前
外虞拘問嚴反坐之律絕布蕪之路設新慶恩思至治無任幸甚
傳曰啓惠具恭肅體念焉○兩司合奏金德龍等事答曰予意已論
連啓不從○司憲府啓曰近來都城空置之地防戍之患比比有之
上年十二月間大賊數十人突入前谷議政家打傷致斃八十
餘歲老父取盡家產為該將者常時不動巡邏捕致令明火強盜
恣行掠奪載之下請其還捕並大將從事官及常該部將先罷後推
其日巡伏軍官拿鞠答曰大將從事官部將並推考速啓十八日不
從遂停啓○辛亥傳曰朴應聲上疏捧入承旨同參承旨史官並書
啓○傳曰前問事即應丁行寬南擬叙用○以虛授為刑曹判書柳
橋戶曹參議韓繼男司藝吳翊檢詳丁行善輔德○壬子以柳汝恒

光海君日記卷第八十六

為說書鄭文翼無文學差請正告○癸丑禮曹啓曰書啓辭今此三
謝恩付於一行便否議大旨則完手符院君李元翼領議政奇自
獻以為漂流解送謝恩亦付於一行無妨判府事沈善壽以為臣
之初意本謂三件謝恩並付一行而答老之普辭不達意而無容
別議若議改鄭昌付以為漂流解送謝恩則依舊例付於節使之行○乙
卯舍人以領議政議答曰今日以人日課試臣與左參贊尹永吉趁
曉進去于成均館至食時等待而館閣堂上無一真推考後之○司
沐院答曰乘寄生乃難得之要藥也人道無差處而只於白翎島有
之食使金基命欲為棺村伐其老妻居氏等至於齊訴而終不聽主
伐之蓋寄生非此地數百年老妻不生育而因此絕種以至闕供於內
局為監司者所當察問空罪而沈然賜給於前使食使欲以他藥提
空已桂無謂及其內局督便之後反以政寄生封進此豈臣子享上
之道乎基命則營私肯公使君上所街之藥絕種監司封進官則不

能詳察以為基貢之地請金基命拿鞠監司及封進官先罷後推答
曰付當嚴懲○丙辰傳曰兩湖海西禁山火木勿令擅砍著實禁斷以清
國禁○司憲府啓曰凡千大小車疏無不書諸史革職之政院
以備後乃是不書規則而上年秋間儒生鄭漢等謀亂至以鳳鳴
網陽批下而政院見失致令派派而無傳不職若矣當該注書諸無
職答曰車疏豈有見失之理乎必有所以注書先罷後推○丙辰
傳曰金基命及審議請並拿鞠監司封進官先罷後推答曰金基命
事明廢處之可矣連啓不從○甲子初學趙德謙上疏曰伏以賊臣
鄭漢窮兇極惡罪資天地殿下不誅只竄海島臣恨不得摧髮而
誅之也且嘗見漢疏謂議為冤援比濟王又以不忍之說搆成君父
之為名欲使殿下得罪於倫紀為他日反獄之地人臣之於君父
忠解悖語有一於此所當誅之不赦况非一非再乎尤可痛者漢乃
敢曰假手於康悍武夫所謂假者指何人耶既曰假之去則其請斬
之意臣不敢忘言也殿下不誅此賊宋與周繼起耶論日生遂近

光海君日記卷第八十六

相和今聞嶺南察訪文景南亦獻於老大退之說通文濟邑傳舉生
實鄭漢韓會等此乃前日館學儒生等討與同時疏頭也事也前左
議政自鄭仁弘之從後而門徒也果南等既獻邪說欲護賊黨指其
疏曰兇賊刑籍之停舉之仁弘止之終不肯止乃始書於果南輩曰
加罪於兩人是何義理捕獲君子之事幸勿他論議可也說以權會
有是於教誨不足惜也又曰比夫人心勢或如老物以事往後為言
此何意見無乃姜氏子之言或之耶老物易言效浮薄子之朝夕反
覆應耶其間說姑姑止一二而此其大槩也所謂姜氏子指大進也
當漢之疏也大進乃與李大綱等結為一腹皆夜相親共主其論而
及其情狀敗露之後乃以正言敢為引避唐安謐護賊罪均只削
其職問雖不逞之徒然其動之說播諸紳士之間惜漢等附會於雅
論反以漢等為兇疏雖雖雖雖雖雖雖雖雖雖雖雖雖雖雖雖雖雖
論言姜氏之子或人也漢等之疏殿下既以鳳鳴朝陽答之而
此輩指以兇疏其無君不道之狀至此極矣伏願殿下垂新德顯
竿之街老姑出兩疏中兇悖之說上以告諸赤廟下以頒示中外

使一國自處得以知讓送執事君父之罪次誅與周以示憲通之罪
 次治大進等道君背師之罪周是白道義理復明航臣職于潛消默
 春更無後日之憂矣谷四子意已諭于太學諸生矣 又景善書其
 父子李太尉李七如使弟之景善切為仁知上疏改或深請遠罪之
 士實之事景善實善之也至是景善等具仁知所為日修善教都
 諫以景善之如學瑞為中北而善大進亦用此有名○乙丑司諫疏
 啓曰金泉宗訪文景南乃瑞寧府院君鄭仁知之門弟子也平生一
 髮一毫皆仁知之所養育而教倡攻師之議以為他日之地其反獲
 究誦之快聞之可觀如此之人不可置在衣冠之列請命削去仕版
 答曰依啓○丙寅傳曰差官入京之日不盡可謂之事勿出朝報○
 寶錄總答曰寶錄總之設今已七年一張尚未印出事實未安莫甚
 於此伏聞前親各房堂上九貢即職十八貢外又大提學他一貢為
 都廳協同即職三貢與總裁官勘定印出而今日寶錄考出時只同
 知春秋南以恭朴趙朱恭前大提學自李廷應答請加出都廳三貢
 榮允而無承當之人請令大提學相考前日啓辭使之刻日完了何

光海君日記第六十六

二

如 王從之○館學滿生閔潔等上疏請治吳長善大進無君父堂
 賊獲之罪從諸臣以空圖是事答曰有疏具浩朝廷有大臣三司
 爾等勿為吏道退去讀書○丁卯以宋錫慶為大司憲朴弘道持平
 尹訓文學李克信雲雲郡守李時發安邊府使尹重三水原府使陳
 泰一承旨南以雄兵曹佐郎柳橋承旨吳汝拙副摺李紱諫判校
 ○戊辰改院啓曰十秋使許筠令譯官來呈各件書冊本院查考前
 日狀格所錄金件捧入而他餘書冊既無自己止辭又無該書公事
 無端捧入有違常規使之親自來呈而後讀中已未知所以請拒考
 令該書速為捧入傳曰九○庚午答合啓金德龍等四職事曰金老
 春既無反坐正律減死定配何妨勿為煩論金德龍事係向化虛的
 難知今依臣配吏觀以廣典三聘限朴就捕估勿虞置○以兩姓為
 禮官判李尚吉戶曹參議吳珥舍人鄭造路樸韓明助司書崔應
 虛掌令○辛未司憲符司諫院秘密合啓前事又請奏請使鄭空譯
 官李應華掌鈞空譯答曰鄭空李應華推考連啓不從時鄭空李
 應華或使使命 詔使時李應華中朝責其得漢不許人疑是鄭空等

重因此處為所困不得準而還李南韓等方忠都堂其卿氏曰此
 力攻之且以納增○司憲府答曰上年秋間嶺南惟兇之輩為中秋
 郭蓮之地至於并跪上洛欲為拔呈自知其計之不售旋即散歸矣
 其時既會空於宜寧而縣警又獨得以其舉餉以而鎮親自監其
 解開者美不貲其請命罷職不叙 王從之○癸酉司憲府司諫
 院秘密合啓請吳長善大進黨議之罪答曰若大進已為空脫不須
 加律吳長前刺奪官爵○甲戌禮曹啓曰傳教之事議于大臣則領議
 政奇自獻以為此乃一國莫大之慶蓋行進為當合前設為一科
 而先受後帝為當右議政都官行為此等事應有可啟前規惟
 在該曹按例稟空官亦無的然可執之見傳曰式年慶試勿遲別舉
 待詔命領降後該行並取進生進文科俟四十人廣水則施行○知文
 館上劄論姜大進具長之罪請快從公論答曰有劄具者姜大進等
 已為空罪休論可矣連劄不從○丙子司憲府啓曰廢士崔永慶之
 死天下極痛萬古至冤也少曾參議李尚吉以搆殺永慶之人遽授
 本職眾情莫不驕憤請命罷職不叙傳曰李尚吉其特臺諫乎考啓

光海君日記第六十六

四

四啓曰崔永慶之無辜 先朝洞燭而放釋李尚吉其時為正言更
 為論啓遂因所政幾死於獄中以此永慶仲克後被罪空配矣傳曰
 知道依啓已去之微永慶以三年元刑減為至寬及其置罰也以為
 與鄭興曾未相識一不通書而 宜祖下都戰於永慶書而示之則
 欺罔之罪固有之矣其死於獄者以其命之不幸也何有於論啓之
 臺官而加之以致士之各作一擠陷之軍一派士頗無不罹其禍者
 殆至三十餘年人功中之計吁嗟矣○以宋諱為大司憲宋先訓
 司諫李椿谷山郡守奇允獻文學金贊幹校理尹切掌令

光海君日記卷第八十六

光海君日記卷第八十七

二月朔戊寅○已卯司諫院啓曰我國以梓之法自箕子行之為東方不易之典以主之法廢則綱常數矣頃者主兵之官欲為中朋於未斤正受教而以李諫院啓辭收議大臣不為結末而止則此乃未成公事也各官不知此曲折仍兵官行移凡私以之弊良者極生軍後所開騰格柱為駭愕下書八道私賤之定於軍後者一切禁斷守令之已為據定者一一摘發重治答曰係常發落○庭鞠領議政寺自獻列府事此嘉奇右議政鄭昌所判我禁非永宗知我禁所公堂同義禁越存也鄭大司憲宗諱大司諫李理利府承旨羅福森鞠○傳曰自上氣不手勢難親鞠福只供辭詳問張應天以落福只者李屠牛者也見時父母皆死已念於京城中主於館內外龍家以屠牛為業當時持龍馬而出此以病荒空才而還外龍心之逆也去中路誘得童七李伊童男日上者南之東萊主於館外張應天家應天問之曰汝是何處人答曰黃洞永同之人也且曰吾欲買僕劉龍馬何應天曰買銀何為也福只曰不得買劉則欲買馬龍馬應天曰買馬何為也福只曰不得買劉則欲買馬龍馬應天曰買馬何為也福只曰不得買劉則欲買馬龍馬

光海君日記卷第八十七

一

使招我坐於帳前曰使漢自稱朴致教以此張子朝達則必李問汝矣此姑拘留於此遂就彼中仍為上未童女春伊供本以山滿居人之標子使喚若與尹哥稱名入逃往東萊止樓子張應天家應天吉子率領將即結縛尹哥直送于東萊翌日人捉我去來萊府使四使漢何人答曰光州居生人云矣府使以為誹不直拍打我云李則尹哥云達為女兒不須杖問告是外致教遂解我童男則中路相逢退來問其所從來則自稱義城人張應天妻使之則崇而所州之榮甚少其皆遂逃矣童男日上供本以星州人移居義城日事往還龍潭到善山問寧地路中見一男人率女兒休息謂我曰我家在善山苦竹汝若從我則當以好衣好食待汝且給馬匹云遂從其入往金山主人使之則崇三日欲逃則主人奪奪衣率去之人亦為敵我遂逃還義城留三四日本官曰我同為上未日上之母某產及其男念可皆拿問取招而了不知此事云○庚辰司諫院啓曰各司貢物任土作貢而仔細之使仍以國利本土所供之物而計阻富而必以價物勒辦圖得大利此實國家之大賊也防約之法著在圖典禁斷之教累勅聖訓而猶弊日甚此時各司之官所當一心痛禁而非徒不飲禁止又從而征之乃於貢物主人處責收米布以為入己之資是分其誠也請令各府另加申明貢物防納者依律定罪各司官責收米布於貢物主人而入己者摘發一依職律事持承傳施行從之○辛巳得曰詳鈔美學海林居漢錄入之○司諫院啓曰戶曹同華使先聲分空米布于州縣州縣之已為收合者一一或冊上送以輪圖用之意臣等曾已使守萊兄矣繼而聞之則州縣或有未及收合之虞云請令該當詳細查置俾無民弊從之○壬子完平府院君李元翼上劄曰伏以教年以來痊瘳未得其詳昨年儒生亦未曾聞戶見客凡推鞠首末及外間說話以為重臣耳言則處之請罪聖官之動搖大祀者其時無聞相議以為重臣耳言則處之事實無動搖之意至於經道之上亦無此等語端臣始為而疑終為而止頃日該官將領教事收議臣意此事係是推鞠間曲折非病狀之目所能知故不敢有所左右而不復立異於該曹公事從今者流聞道路之間聚有洶洶以為同以將延及於大祀臣驚心悚膽不

光海君日記卷第八十七

二